OCUAC

大阪市立大学山岳会会報　特別号　２００９．３．３

佐藤一良さん追悼集

目次

１．プロフィール　１～７　頁

２．弔辞　８～９　頁

３．佐藤さん追悼　１０～３３　頁

４．漢詩　３４　頁

１.プロフィール

憩いのひととき　　於：ヒュッテ雪線

遺影　：佐藤　一良　さん

２００８年１２月３日　永眠

享年　：６４歳

佐藤夫人に伺ったこと

（２００９年2月2日　奥田寛　記）

1．結婚前後のころ

蝶理（株）で同期、同職場でした。私の家は晩酌でビールをコップ一杯程度、お酒には弱かったのですが、交際中　主人来訪時には必ずお酒を出すようにしました。美味しそうに飲んでいたものです。

カンジロバ登山で年末に帰国して半年後、タイ赴任の内示がありました。国内営業から即、海外駐在は初のケースであり、「研修生として３年」とのことでした。「身体が丈夫で、どこでも寝れる」が決め手になった、とは本人の説明です。

当初「３年後に帰国してから結婚する」ことを考えたのですが、「独身より妻帯で駐在した方がよい」とのアドバイスもあって、急きょ結婚式を挙げることになりました。会場探しに奔走し、ようやく出発直前の１９７１年８月２８日に挙式しました。

2．バンコク駐在は５年９ヵ月

本人は米国・香港経由でバンコクに着任しました。当地では、多忙な中でゴルフを始めたり（出勤前、練習に励んでいました）、釣りに出かけたりもしていました。普段は土・日しか家族一緒に食事する機会はありませんでした。が、自宅にお客さまを招待したり、１～２ヵ月に１度　泊まりがけでお客さまと出かける際に家族も帯同させ、共に過ごす時間を設けていました。

3．四光峰登山のこと

バンコクより帰国して約１０年経過した頃、お話がありました。まったく思いがけなく隊長の要請を受けたようで、私も当惑しました。もっとも、出発前の合宿で久しぶりに山行し、節制もして、本人が意識して健康に留意した時期だったと思います。

4．東京での単身生活

四光峰登山の２年後、東京に単身赴任しました（以降、香港駐在まで）。イタリアやフランスから製品輸入するためによく出張し、めったに大阪に帰ってきませんでした（もっとも、私の方から月１回東京へ出かけたり、時々高松で会う機会がありました）。たまに帰宅した折は、子らと食事やハイキングをするようにしていました。ただ家族旅行というものはなく、実家の高松に行くのがそれに替わるものでした。

5．香港駐在から蝶理退職まで

駐在中は、テニス仲間の人達と週に一度テニスをしていました。又、そのあと自宅での皆様との飲み会がとても楽しそうでした。帰国直後の健康診断結果が悪く（特に肝臓）注意されていましたが、本人は自覚症状がないので意に介さず、お酒もタバコ

もやめられませんでした。

6．蝶理退職後の２年間

５８歳で円満退職し、２年間は自宅でのんびり過ごしていました。子供達も独立して家を離れ、二人だけの生活になっており、この期間が結婚してから一番よく共に過ごした時期でした。東北や信州に旅行もしました。そしてスイミングスクールは肩痛をきっかけに途中退会してしまいましたが、この頃から山岳会の小笹スキースクール（１２月および２月実施）参加を始め、以後毎回楽しみにして参加していました。

7．ダイヤモンド電機に入社

２００５年７月に入社後も、健康面では相変わらず私の懸念は続いていました。入社翌年（２００６年）２月に盲腸炎手術をしました。具合が悪かったのに本人が我慢をしたため、治癒するのに長引きました。また次の年（２００７年）の健診で再検査を指示されたのに病院に行かず、翌２００８年２月に腎炎のため入院しました（２月検査入院、３月２６日治療入院）。私としては気をもむばかりで、子供たちも身体を気遣って言ってくれたのですが、言うことをきかないのは相変わらずでした。

一方、仕事は面白かったのではないでしょうか。部下の方々との飲み会もして、楽しく仕事に取り組んでいたと思います。退院するや、早々と出社しようとしました。

8．高松の両親のこと

義母は阪神大震災の前年（１９９４年）１１月に亡くなり、以降１４年間　義父は高松の自宅で一人住まいをしています。私は２週間に１回ほど行き来していますが、主人も春・秋の三連休や５月のゴールデンウイークそして夏休みを利用して帰っていました。皆さまにご披露した野菜づくりは義母が亡くなった翌年から始めました。

9．緊急入院のこと

その２～３ヵ月前から変調の兆しがありました（腹具合がおかしい、と頻繁にトイレへ行っていました）。「十分に休養をとって、会社へ行ったら」と言っても「そんな中途半端な仕事はできない」と答え、口喧嘩になってしまったものです。

緊急入院当日（１１月２７日）、鳥取からの出張の帰途、三ノ宮駅で部下の方を自分の車から降ろして自宅に帰ろうとしたものの、やはり体調悪く、すぐ近くに駐車して自分で携帯電話にて１１９番通報したようです。

私はその時高松におりましたが、なぜか連絡がうまくつかず、結局、新幹線で東京から大阪に移動中の課長さんから一報を受けた次第です。深夜１２時前に神戸の労災病院に駆けつけましたが、集中治療室に入った主人とは声を交わすことが叶わず、そのまま１２月３日午前９時６分の死亡宣告になってしまいました。

佐藤一良さんの経歴

１９４５年（昭和２０年）　３月１０日　香川県高松市に生まれる。

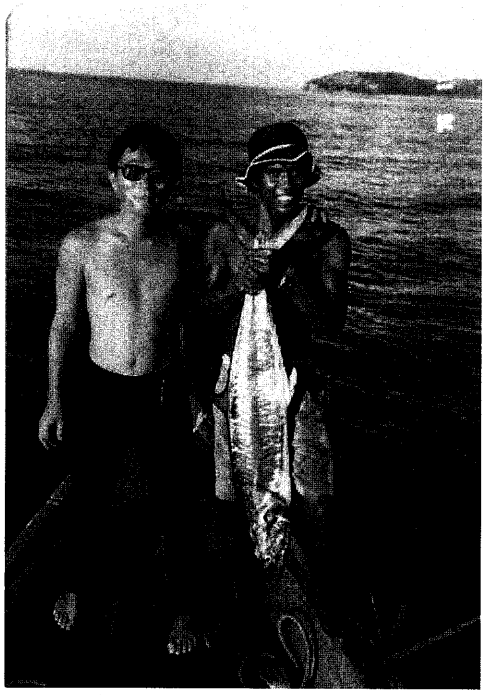
学歴

１９６３年（昭和３８年）　３月　香川県立高松高校　卒業
　〃　（　〃　）　４月　大阪市立大学（経済学部）　入学
１９６７年（昭和４２年）　３月　〃　（　〃　）　卒業

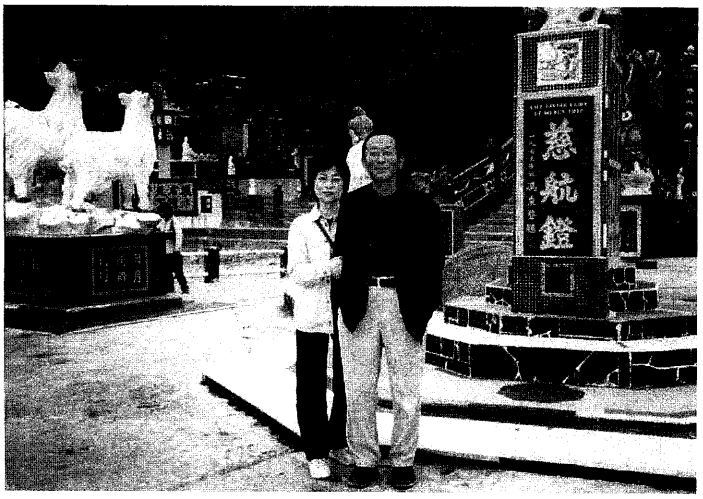
職歴（海外登山含む）

１９６７年（昭和４２年）　４月　蝶理（株）入社
１９６９年（昭和４４年）　４月　繊維原料（糸・綿）国内営業部　配属
　１９７０年（昭和４５年）　８月～１２月　カンジロバヒマール登山（副隊長）
１９７１年（昭和４６年）　９月　バンコク（タイ国）へ赴任
　泰蝶理（株）駐在
１９７７年（昭和５２年）　６月　大阪本社に帰任
　繊維原料（糸・綿）の輸出部門　配属
１９８０年（昭和５５年）　２月　大阪本社・繊維輸入製品部　配属
　＊韓国から繊維製品の輸入販売
１９８８年（昭和６３年）　４月　大阪本社・繊維輸入製品部・第一課課長
　＊中国から繊維製品の輸入販売
　１９８９年（平成　元年）　３月～５月　四光峰登山（隊長）
１９９１年（平成　３年）　４月　東京本社・輸入製品部・欧州課課長
　＊イタリア・フランスから繊維製品の輸入販売
１９９５年（平成　７年）　４月　東京本社・事業開発室室長
１９９６年（平成　８年）　４月　東京本社・アパレル事業部・第一部部長
１９９８年（平成１０年）　４月　香港へ赴任
　蝶理ファッションネットワーク（株）社長
２００１年（平成１３年）　９月　大阪本社に帰任
２００３年（平成１５年）　３月　蝶理（株）円満退社
２００５年（平成１７年）　７月　ダイヤモンド電機（株）入社
　総務部次長
２００７年（平成１９年）　４月　総務部部長

２００８年（平成２０年）　１２月３日　逝去



バンコク駐在のころ



香港駐在のころ

イタリア出張時（１９９２年８月３日）

佐藤一良さんの山行歴（大阪市立大学山岳部　時代）

１９６３年度（１回生）

５月山：白馬・八方尾根合宿
　　＊スキー＆唐松岳往復
個人山行：大峰縦走（５月末～６月初）
夏山　：剱岳　定着合宿
　　＊剣沢二股ＢＣ
　　合宿後の縦走
　　＊立山～前穂高岳～上高地
秋山　：明神岳偵察
　　（明神岳Ｖ峰～Ｉ峰、前穂、奥穂）

冬山　：剱岳・早月尾根
個人山行：氷ノ山・小代スキー場（２月）
春山　：明神岳・最南峰～北穂高岳
　　（Ｖ峰）

１９６４年度（２回生）

５月山：西穂高岳より槍ヶ岳縦走
夏山　：個人的事情で参加不能

個人山行：谷川岳（９月）
秋山　：偵察山行①（１０月）
　　烏帽子～北鎌尾根～新穂高
　　＊冬山用＆春山用荷上げ
　　偵察山行②（１１月）
　　船窪岳
一般募集：大山（１１月）
冬山　：大喰西稜～槍・北穂高岳
春山　：烏帽子岳～白馬岳

１９６５年度（３回生）

＊チーフリーダーとなる。
５月山：白馬・栂池合宿
　　＊スキー

夏山　：剱岳　定着合宿
　　＊剣沢二股ＢＣ
　　合宿後の縦走
　　＊針ノ木～白馬
秋山　：冬山偵察
　　（鋸岳～甲斐駒ガ岳～仙丈ガ岳）

冬山　：足骨折のため参加不能

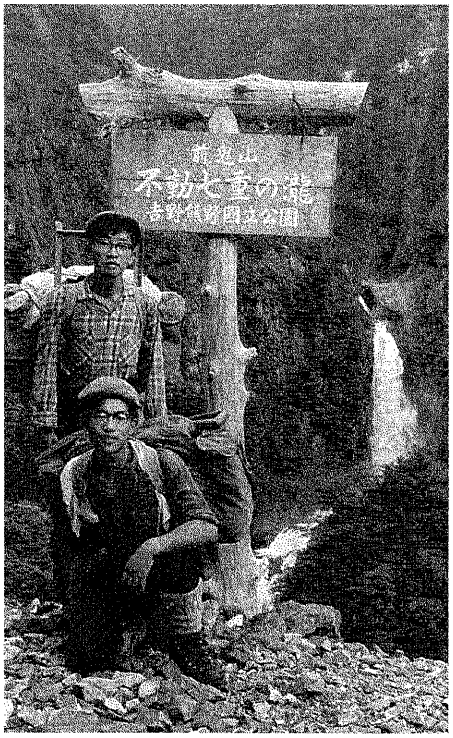
春山　：　　同上

１９６５年度（４回生）

＊チーフリーダー継続（３回生不在の為）
５月山：穂高・岳沢合宿
夏山　：穂高　定着合宿
　　＊横尾本谷ＢＣ
　　偵察山行（北海道・知床半島）
個人山行：北岳・バットレス（１０月）
秋山　：富士山アイゼン合宿（１１月）
冬山　：北海道・知床半島縦走

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

春山より、２回生にリーダーシップ交代



１９６３年６月　大峰山系・前鬼にて

１９６４年５月　穂高・ジャンダルム頂上にて

１９６４年３月　明神岳Ｖ峰フィックス地点にて（左から２人目）

２.弔辞

ここに大阪市立大学山岳会を代表致しまして故佐藤一良君の霊前に哀悼の意をささげたいと存じます。

佐藤君　きみは何故そんなに道を急がれたのでせうか。去る１１月２９日に催された、大阪市立大学山岳会の前会長であられる池永薫爾先輩の傘寿のお祝いの席に、池永先輩経営のダイヤモンド電機株式会社の総務部長であるきみの姿が見えないので、不思議に思っておりました。ところが、暫らくして君が前日に車を運転中に気分が悪くなりそのまま入院したとの話を耳にしました。しかし１２月１９日には梅田で山岳会の今年最後の役員会があることになっており、それまでには退院して、当日は議事が終われば、例によって賑やかに一杯飲んで今年の分は終了と気楽に考えておりました。ところが、１２月３日の朝、きみが亡くなったとの第一報が飛び込んで来ました。青天の霹靂とは正にこの様な状態を云ふのでせうか。

きみは高松高校時代にも山岳部に所属され、大阪市立大学に進学されるや、同じく山岳部員として又チーフリーダーとして多くの部員を率い、南北両アルプスは勿論のこと、国内各地の積雪期の山々に尖鋭なアルピニストとして、活躍されたことでした。きみの現役時代に、特に目覚ましかったのは、当時の大学山岳部のレベルとしてはるかに高い、北の果て、北海道の知床連山の冬季登攀といふ難事業に果敢に挑戦され、部全体のレベルアップに貢献されたことでした。この力が後年のきみの率いる海外遠征への底力となって、そのパワーを発揮したことでした。１９８９年、嘗ての、我が山岳会のヒマラヤランタン・リルン峰（７２４５米）初登頂に引続く大きなイヴェントとして、ヒマラヤのチベット側に位置する四光峰（スークアンリ７３０８米）の初登頂を大阪市が市制百周年の記念事業として企画されました。この時の登山隊長として若手のOB,現役を指揮して、初登頂に導き、全員無事故にて帰国したのはきみの岳人としての能力の高さを遺憾なく発揮された場でありました。この様な大型の海外遠征を成功に導くには、単に岳人として山登りの技術が秀れているだけではなく、隊の運営だけでもなく、現地の事情この場合は中国チベット自治区ですが、それに旨く適応して行くことが重要であると云われております。

きみは大学卒業後、総合商社蝶理に入社し、アジアは云うに及ばず、ヨーロッパにまで活躍の場を持ち、優秀な商社マンとしての腕を磨いておりました。この経験が、後年、四光峰の初登頂といふ輝かしい業績に結びついたものと思はれます。

近年はダイヤモンド電機株式会社の総務部長としての激職のかたわら、山岳会の幹事長として、私のよき相談相手として、会の統率に努力されておりました。きみの一見豪放に見える表面とは違って、内面には、非常な優しさと、気配りを感じましたが、これが現役時代、OB時代を通じて多くの人達に愛され、グループを統率する良きチームワークの基盤になっていた様に存じます。

昔ならいざ知らず、当今６０才余りで生を終るにしては余りにも若過ぎる様に思ひます。たまたま病を得て、激しい活動が押えられたとは云え、病の癒えたあかつきには、再びスキーに登山に、我々と共に山を楽しみたいとの思ひは一際強かったと察しております。先にきみとほぼ年代を同じくする山岳部部長であった小林君を失ひ、ここに又きみを失ふことは我々OB にとっては、両腕を次々にもがれるばかりの痛みを感じます。残された御家族のことを思ひますにつけ、きみの無念さは察するに余りあります。ここにきみのご冥福を心よりお祈り申上げまして弔辞とさせていただきます。

合掌

平成２０年１２月５日

大阪市立大学山岳会会長
川勝　弘一

３.佐藤さん追悼

（氏名）		頁
池永　薫爾	（昭和２７年　学部卒）	１１
廣谷　光一郎	（昭和３０年　理卒）	１２～１３
浅部　禎一	（昭和３４年　経卒）	１４～１５
山辻　英也	（昭和３８年　医卒）	１６～１７
伴　明	（昭和３８年　経卒）	１８
岡本　恒夫	（昭和３８年　法卒）	１９
常慶　和久	（昭和３９年　商卒）	２０～２１
藤村　達夫	（昭和４１年　商卒）	２２
丸子　隆志	（昭和４１年　経卒）	２３
山田　裕敏	（昭和４２年　経卒）	２４
島川　勝	（昭和４３年　法卒）	２５
澤井　弘忠	（昭和４６年　経卒）	２６～２７
福山　昇二	（昭和５０年　工卒）	２８～２９
田中　博之	（昭和５６年　医卒）	３０
奥田　尚志	（昭和５９年　理院卒）	３１
尾形　睦（矢倉）	（昭和５９年　文卒）	３２
下田　勝久	（平成　４年　理院卒）	３３

佐藤　一良　君

池永　薫爾

私は３年前、蝶理（株）定年後の貴君にお願いし、ダイヤモンド電機（株）の総務部長に就任して頂きました。

昨年春は体調をくずされ入院されましたが、約一ヵ月後復帰されました。
時にしんどそうにしておられる姿を見かけ、大丈夫かと声を掛けることはありましたが、「大丈夫です」との貴君の返事に甘え、休養を要請することも出来ず、最悪な事態を招いてしまった責任を感じています。

貴君には約３０年前バンコク出張の際、当時　蝶理（株）の駐在員をしておられた貴君及び奥様に随分御世話になりました。
私は妻を同伴しておりましたが、奥様に妻をショッピングへあちこちとご案内いただきました。又、週末には近郊のリゾート地へご案内いただき、ゴルフを楽しんだ後バーベキューをご馳走になりました。

昨秋、私の傘寿を祝う会には、会を盛り上げるべく企画して頂き、素晴らしいパーティにして頂きましたが、その数日前緊急入院され、貴君には参加して頂けませんでした。
そしてその３日後の悲報です。

佐藤君、有難う。

余りにも早いお別れですが、安らかにお眠り下さい。

佐藤一良の山を想うこころ

廣谷　光一郎

佐藤一良氏との出会いは、富士山合宿、杓子双子尾根合宿、また個人的には四光峰後、香港での再会など、思い出はたくさんある。何と言っても四光峰に関しての付き合いが最も心に残る。

彼との忌憚のない登山に関する想いを話し合ったのは、1970年カンジロバヒマール主峰に初登頂し、海外駐在より帰国した時であった。
開口一番、『カンジロバの許可を有難うございました』と言われたのが印象的であった。
当時、市大山岳会の海外登山に対する考え方は、いわゆる経験豊かなベテランを選抜して隊編成することがベターだと考えられていたが、カンジロバヒマールの経験から、彼は『これからは若いメンバーの山への情熱を燃やして、これにこたえることがベストだ』と主張していた。

ランタン・リルン登頂後、10年を経て、市大山岳会の海外登山の気運も高まり、二年越しの準備をしていた頃、泉隆次郎最高顧問より「今度の海外登山の隊長は君がやればよい」と言われ、彼はしばらく消えかかっていた山への想いに再び火が点いたのであろう。

以降、私と交互に北京に通い、登山許可のための交渉を中国登山協会と再三に亘り行ったが、当時はヒマラヤに於ける未踏の7000m峰は少なく、また、ラサ戒厳令直前の事など非常に難しい状況であった。

ここで海外駐在の経験豊かな彼は登山協会の史占春主席との関係を密にし、見事に、中国登山協会の取って置きの四光峰の登山許可を獲得したのであった。　1989年3月5日登山隊は離日、8日には成都よりラサに入った。3日間の滞在中、体調を崩さなかったのは全隊員中、彼と私だけであった。彼曰く『やっぱり酒飲みは高所に強いですなあ！』
そのようなこともあって、パロン氷河でのBCで若い隊員達のルート工作を遠望しながら二人して取って置きの高級ウイスキーを飲んだものであった。

帰国後、彼は次のような報告をしている。『四光峰登山は市大山岳会の新たなる発展の

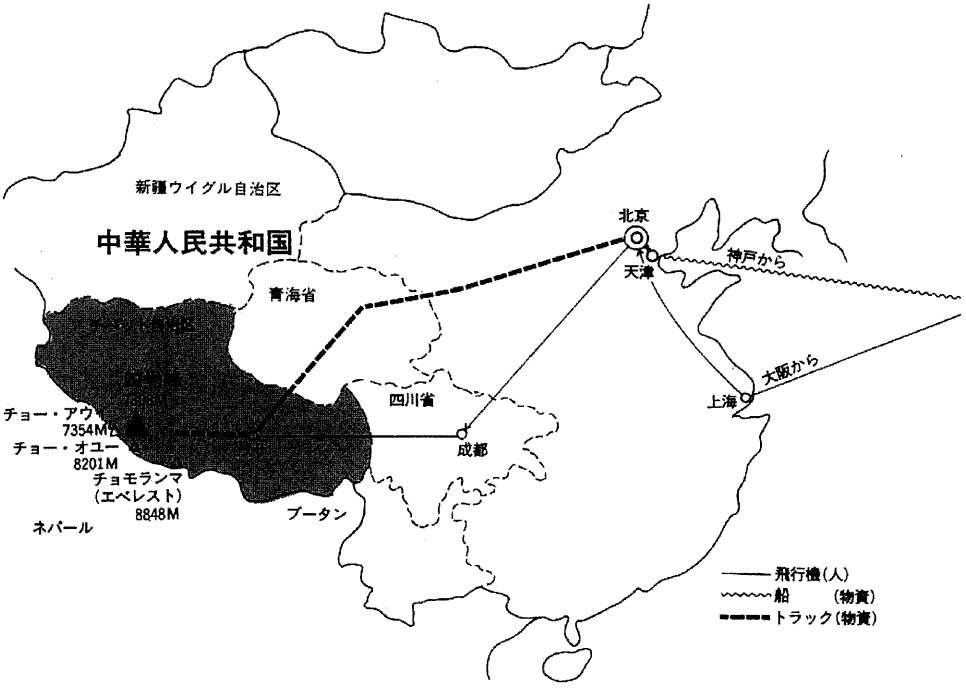
きっかけとなったと思う。若干のOB，経験少ないほとんど現役が参加した形で、成果は初登頂であった。隊員の各自が今回の登山を位置付け、次なる自分の山を見つけてくれることを信じている』と。このことは“登山は人に言われてやるものではない”という彼の信念を伝えようとしたメッセージだと思う。

最後に市大広報（1989年11月号）に彼が投稿した一文は、次のように述べている。
「5800mのABCで登頂を見守りながら脳裏に浮かんだある予感の正体を考えている。
私がいつか人生の幕を閉じる時、あの素晴しい情景を必ず思い出すという予感であるのか、あるいはこの至福の時がうたかたの如く消え去るという予感であろうか。この美しい時間が終って欲しくないという感覚が妙な気持ちを起こさせたかも知れない」

「11月池永先輩の傘寿の会で廣谷さんとお会いし、皆で山の歌を歌って、飲みましょう！」と人懐っこく話したのが私にとっての最後の会話であった。

合掌

四光峰へのルート



佐藤一良氏を偲んで

浅部　禎一

２００５年６月２７日、ダイヤモンド電機（株）池永薫爾会長の秘書兼受付をしているＴ嬢から、「市大山岳会の佐藤さんとおっしゃる方がお見えになりました。部長の先輩ですか？」との連絡を受け、池永会長との入社面談に立ち合わせて頂いた。

Ｔ嬢が「先輩」と勘違いしたのも当然で、商社マンとして永年の海外勤務の後、定年を迎えられた佐藤氏は、どことなく「大人（たいじん）の風格」をそなえられ、丁度　海外生産拠点の展開戦略で人材不足に悩む会社にとっては、誠に時宜をえた方として、即刻入社が決定。７月から第二のサラリーマン生活を始められた。

当社では、既に伴明氏が常勤監査役の要職にあり、私も１９９５年以来１０年間、現役の総務部責任者として働かせて頂いているだけに、「山岳会の古手は、役立たず」と云われないよう、三人がそれぞれの分野で、文字通り「やま屋らしく懸命に働こう」と誓い合ったものである。

その後、会社を取り巻くグローバル化の大波は、遥かに予想を越える「高波」であったが、氏は総務部次長として池永重彦社長の特命のもと、グローバル人事戦略の立案・執行の面で活躍され、２００７年４月には、私が顧問へ退くのを機に、総務部門の全重責を一手に引受けられた。

しかし、好事魔多しのたとへ通り、２００８年２月に腎臓を悪くされ、市大付属病院へ入院加療される事態となった。この間池永会長も大変心配され、その意を受けて何度かお見舞いに伺ったが、「これが病人？」と思うほどお元気で、腎臓病の患者食の不味さと、ステロイド治療の副作用をコボされる一方、「今回は本当にラッキーでした。あと一足遅れてると透析ですよ・・・と医者に言われてます。」と明るく完治の見通しを話され、その通りにほどなく退院し、現業に復帰されたので、周りの者は、ご病気のことなどすっかり忘れてしまっていたと云うのが、正直な状態だった。

その後、１１月２９日に池永会長の傘寿のお祝いを、関係者の内輪の催しとして開催されるに当たり、幹事としてキメ細かく準備され、伴氏の発声で歌おうという市大逍遥歌の

プロローグまで事前にメールを頂いていたのに、当日お顔を拝見出来なかった。

直前の鳥取工場への出張の帰途、三宮で倒れて入院されたと伺っても、そのうちまた元気なお声が聞けるものと信じて疑わなかった。

このため、迂闊にもかねて計画していた家内との海外旅行へ飛び出してしまい、１２月８日に帰国後、留守中のメールで氏の訃報に接して茫然自失。全く信じられない思いだった。

もはや迂遠のお詫びのしようもない、此岸と彼岸の遠い隔たり・・・
ただ、私がそちらに渡る日もそう遠くはない、そのうちにまた会いましょう・・・
と云えるだけの現実の想いを、せめてもの挽歌に込めて、氏のご冥福を心からお祈り申し上げます。

挽　歌

老ひ果てし　容貌（かお）はみせじと駆けぬけし　師走の風の君を偲びぬ

はからずも　君がいのちのその際（きわ）も　知らで異国の墓地にありしぞ

（ロンドン　ハイゲートセメトリー）

早すぎる　別れぞ口惜し山おとこ　ビジネス戦野にたたかひ死にき

合掌

佐藤一良君を悼んで

山辻　英也

佐藤一良君　６４歳。

あまりに早く逝ってしまった君に、胸中いたむばかりで、言葉がない。

今回、病に倒れた時も、盲腸炎で手術した時も、山岳部に医者が居るということを認識せず、相談してくれなかった。無念でならない。

早逝ではあるが、逸話、エピソードは数々ある。その中で、私は個人的に佐藤君に依頼した、２０年前の記念講演会のことを語りたい。

平成元年（１９８９年）秋、私の次女は中２で、妻がＰＴＡ新聞広報担当で、講師を探していた。その年は桜台中学校創立十周年で、記念講演にふさわしい講師は、その春、四光峰登頂隊長として成功した佐藤一良氏が適切ではないかと、妻や周りから迫られていた。個人的には親しい先輩・後輩であるけれど、公に講演となると、帰国後、多忙な佐藤君には申し訳なく思った。しかし、心よく引き受けてくれた。
今も、そのテープが手許にある。

テープを再度聞いてみる。懐かしい、二度と聞くことのできない元気な声が流れてくる。佐藤君は当時４４歳、高・中・小の３人の子どもの父であり、大阪の商社マン。高松の出身、高校時代はブラスバンド部でアルトホルンを吹いていたこと、中２の時、北アルプスの槍ヶ岳、立山の写真に魅せられ、山岳部に入りたいと、ずっと望んでいて、大阪市大（経済学部）山岳部に入部したことなど自己紹介ののち、今回（１９８９年）登頂成功の四光峰登頂の経過が語られる。

１９７０年、２４歳の時、１５０日かけ、大阪市大山岳部員として、西ネパールのカンジロバヒマールに登頂し満足しきっていた。

誰も見たことのない谷や尾根
　　誰も感じたことのない風
　　誰もふれたことのない氷や岩

仲の良い友と一つのザイルに繋いで登山をするのは、すばらしく、楽しいことだった。

その後、サラリーマンであり、仕事も忙しく、登山から離れ、趣味も魚つり、トローリングにはまっていた。
或る日、突然、学生時代からお世話になっている長老（大橋さん？泉さん？）から呼び出され、大阪市大山岳会は、日中友好記念行事として、中国側と協力して四光峰登山を

計画、その隊長をやれと言われた。お世話になっている人の、この一言には、重いものがあって、どうしても断れなかった。

２年にわたる準備期間中に、北アルプスで何度も合宿をくり返した。
合宿で、食事を共にしている間に、それぞれの立場や役割、それぞれの評価や能力や性格が見えてきて、ごく自然におさまっていったと思う。
雪山での厳しい生活をくり返すと、自分自身の性格を隠すことができなくなる。メンバーの中で、長所も欠点もさらけ出すことになる。
それを互いに許しあうことができた時、隊長の指令がなくとも、まとまっていく。
これが、チームワークのこつだと思う。
時間はかかるが、きびしい自然の中で、長期に共同生活をすることによって、自然に発生したチームワークこそが、本当の力になると。

そのあと、テープは、皆さんのお手許にある四光峰登頂記念誌「四光峰の風」の報告のように、スライドと説明が続き、

「チームワークによって、登頂は成功しました。
登頂を果たした者が、たった一人であっても、
その栄誉は、隊員とそれに携わった全ての人々に
輝きます。」と結んでいる。

この信念が、佐藤一良に隊長として成功させた所以であろう。

この追悼記念誌発行に鑑み、佐藤一良の生き方をみると、故郷も、学生時代も、家族も、仕事も、酒を呑む時も、ひょうひょうとしていながら、それぞれを熱く想う、<u>山岳人のロマンを生き抜いた男と言わざるを得ない。</u>
後輩にして我々に、山の道を、人の道を教えてくれたことに感謝しつつ、ご冥福を祈ります。

「P.T.A.桜台」第２９号　　平成元年12月22日(6)

ヒマラヤに登って
―記念講演会―

十月二十五日、十周年記念式典後、十時より、佐藤一良氏を講師に迎え、講演が始まりました。スライドを見ながらの説明を聞き、子供連も、保護者の皆さんも、心に訴えるものを感じてもらえたら、文化委員一同うれしく思います。

文化委員長　砂田　和子

ヒマラヤ四光峰と佐藤一良隊長

人は些細な事柄でその一生を方向づける時があるものです。
日中友好登山隊隊長の佐藤一良氏も又、中学生の頃に見た"立山"の写真の美しさに取りつかれ、大阪市大山岳部に入学した、と自負し、年間百二十日もの山歩きで、四十四才の今日の基礎を築かれたようです。
四光峰（七三〇八米）登頂者十五名中六名「大きな物を求める時はその夢を叶える為に、厳しく、地道で地味なトレーニングと準備が必要です。この登頂の為二年間に及ぶ厳しいチームワーク作りに励みました。
登頂を果たした者がたった一人であっても、その栄誉は隊員と、それに携わった全ての人々に輝きます。」
講演の中で最も心に残ったお話です。この事は登山家のみならず、人としての生き方を教えてくれています。子供たちも好きな事、興味ある事にどんどん枝葉をつけて、夢を叶える人生を歩んで欲しいものです。

大本　典子

追悼　　佐藤一良　様

伴　明

貴君が永遠の彼方に旅立ってから、はや２ヶ月近く経ちました。もうこれから会えないということがどうしても腑に落ちません。あの世を通り越して娘さん（まりちゃん）夫妻の居るオーストラリアにでも様子を見がてら遊びに行ってるのではないのですか。その内ふらりと帰国して山岳会の幹事会に顔を出す、あとの飲み会で嬉しそうに娘さん夫妻の生活振りを話してくれそうな気がしてなりません。

貴君と一緒の山登りで想い出深いのは　夏の甲斐駒・黄蓮谷右俣、間ノ岳・細沢、５月の剱・八ツ峰一峰三稜など、どれもしんどい山行でした。
AACK の中山君、毛利君を入れ４人で行った黄蓮谷右俣では、結構苦労して登りきった辺りで日が暮れてしまい、すきっ腹をかかえて稜線直下でのビヴァークがひどく寒かったのを覚えています。
間ノ岳・細沢では、沢そのものは面白かったけれどもその後の間ノ岳への登りと大樺沢の下りで時間がかかりすぎ、山田裕敏君が先に降りて手配してくれたタクシーで甲府駅に着いても最終列車に間に合わず、駅ビヴァークして翌朝東京の蝶理に出社したことなど。
剱では四光峰の事前トレーニングでハシゴ谷乗越しで合宿したさい、片岡泰彦君と３人で剱沢から一峰の三稜を登りました。あのときの貴君はとても元気でしたね。下りは一、二峰のコルから雪壁を長次郎雪渓に下りたのですが、貴君はさっさと先に下まで降りてしまい、私がびびりながら亀の速度で降りて行くのを見守っていてくれたのも懐かしい思い出です。

貴君とは山登りだけでなく、蝶理での長年にわたる勤務、その後の池永先輩のダイヤモンド電機での勤務も共にし、よく仕事をし、よく酒を飲みました。
貴君の後輩にたいする面倒見の良さ、人と人との関係を良好に保つ「すべ」はいつの世にも大切だなと、思い知らされています。

市大山岳会にあっては、カンジロバ遠征に参加し、また四光峰登山隊を組織し初登頂に導いた功績は燦然と輝き、ヒマラヤ名峰事典にも佐藤一良隊長の名前が記載されていますよ。

会の幹事長として、いずれは会長としても活躍してもらうべきところ、あまりにも早すぎるかなと思うのですが、神仏のお召しとあらばやむを得ません。
しばらくは安らかに休まれて、その内あの世での山登りをお楽しみください。

佐藤さんありがとう

岡本　恒夫

1．新入部員の頃

佐藤さんが山岳部に入って間もない頃、酒にはまだ強くなく、我々ＯＢとのコンパで、すっかり酔ってしまい、私の家へなんとか辿り着き、２階まで背負ってあげたのはいいが、下駄を履いたまま布団に入っていた。これが長いお付き合いの始まりとなった。

2．上高地にて

彼が３回生の頃、二人で西穂へ。稜線でツエルト一枚で夜を明かし、なんとか無事に上高地に下った。彼の高校での先輩にもあたり、香川県庁に就職して間のないＯＧの岡内くんに、二人で励ましの寄せ書きを送った。彼は本心か嘘か「上高地より愛を込めて」と書き、先輩思いのお茶目なところがあった。

3.屋島にて

伴さん、就職して間もなく忙しい佐藤さん、そして私の三人で、早逝した岡内くんの墓参りに四国へ行った。高松の佐藤さんの実家に泊めて戴き、ご両親の暖かいもてなしをうけた。その上、彼は我々の大好きな讃岐うどんをご馳走すると言い、屋島へ案内し、水車の廻っている店で釜あげをたべた。彼は人の好みをよく知っていて、四国の人らしく「お接待」の上手な人であった。

4.東京、用賀にて

彼はパリーやミラノによく出張していたが、うまく時間がとれたというので、伴さんと三人で蝶理の近くの店に入り、夕食をした。その後、私は用賀にある彼のマンションに泊めてもらった。私にベッドを提供し、彼はシュラフに寝、相変らずの先輩思いの彼だった。

5.駒ヶ根にて

彼と山荘「雪線」で一緒になったとき、幼稚園児だった私の孫にストーヴの薪の燃やし方を園の先生のように教えてくれた。小学校高学年になった今もそのことをよく覚えて「やさしいおじさん」の小屋につれてってとせがまれている。

泉三世（二・五郎）の佐藤塾

常慶　和久

「色々と本当にありがとうございました。行って来ます。９０日間チベットを存分に楽しみ、５月末には２０人揃って帰ってきます。次の世代を育て、リーダーを作ってきます。」（１９８９．３．１）と、四光峰へ出発する佐藤隊長からの絵葉書が届いた。
思えば、カンジロバ初登頂（１９７０年。佐藤副隊長２５歳、平均年齢２４歳）から１９年が経っていた。

当山岳会は、長年にわたって泉最高顧問のリーダーシップで纏まりの良さを誇ってきた。ヒマラヤ遠征においても、泉さんの主導と「ひとつになる」ための統制が展開されてきた。そしてランタン・リルン第１次隊から第２次隊へ、それからカンジロバ隊へ、カンジロバ隊から第３次ランタン・リルン隊、そして四光峰隊へと、［人］とその「経験」をのりしろとして、３０年間（今年２００９年までは４９年間）に３峰初登頂の成果を挙げた。

佐藤君は蝶理に入社してからも現役山岳部員の面倒見がよく、酒を呑んでは箕面の社員寮で後藤君らと、リルン病（ヒマラヤ＝リルンのヒマラヤ視野狭窄症と揶揄）のＯＢを尻目に、ヒマラヤ研究会を重ねていた。小生はリルン雪辱を期していたが、「どんどんやれ！」と泊まり込んで嗾けていた。

１９６９年１２月山岳会の総会（小生は欠席）で、佐藤君は泉さんから「馬鹿者！」の一喝を喰らった由。当日の朝刊は、カンジロバヒマールの登山許可をネパール政府が大阪市大に承認したと報じた。機関未決定のまま登山申請をしたことが逆鱗に触れたのだ。
嗾けた責任から小生は雑務・隊長を引き受けた。積水の六甲の山の家で、方針・役割分担を確認した。資金調達のため、日本・ネパール初の合同登山隊を標榜した（１９７０年万国博覧会開催理念に則った）。これには当初全員反対していたが、「楽天的に行こう！」と佐藤君は副隊長として「ひとつにまとめ」てくれた。

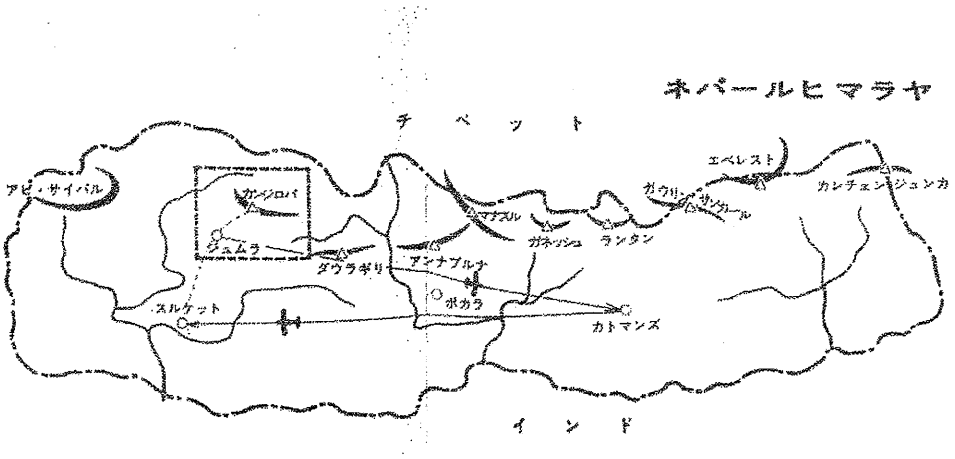
臨時総会で正式決定されるや、準備に拍車が掛かった。連日連夜、隊員と準備委員たちは中津の泉宅に屯して、幾多の酒飯に与かった。当時泉宅には三郎・四郎のご子息がおられ、年齢も近く、佐藤君は二郎さんと三郎さんの間で二・五郎、後藤君は三・五郎だった。両ご子息に「山岳部に家を乗っ取られた」と言われるほどご迷惑をかけた。

合同遠征隊は「初登頂の快挙」により「山岳登攀賞」のおまけを頂戴したが、後藤君に「登頂という事実より、そこにいたる充実した日々を暮らしたことに強い喜びを感じる」と言わしめたのはオーガナイザー佐藤の面目躍如たるところだ。

１９８７年。宿願のランタン・リルン初登頂後マグマのたまった山岳起業家（泉最高顧問・大橋会長の巨星）は、大阪市制１００周年を記念してヒマラヤ遠征隊派遣に動き出した。そして隊長に佐藤一良君を指名し、冒頭の出発となった。BC で泉流大喝を落し、見事成功を収めたわけである。

その後は泉・大橋の両巨星の薫陶を受けた最後のリーダーとして幹事長の任にあり、佐藤塾の繁栄を期待していた志半ばの急逝であった。その思いはにこやかな遺影にあった。

「くろ枠の　　語りかけくる　　小春かな」　　合掌



故佐藤一良君のこと

藤村　達夫

昨年の今頃であったか、佐藤君が小笹先輩の主催されているスキーに行って、足が象の足のように腫れて、検査の為に緊急入院したと聞いた。病院にいる彼の携帯電話で、概略を知った。

それからの病状の経緯は良く知らない。退院してから仕事に復帰した事は聞いていた。当初の入院時の印象からすれば、意外と大した事もなく、良かったと思っていた。

それから後、山岳会会報の件の集まりで、山田君から声がかかり、幹事の数人の集まりに、私も参加させて頂いた。佐藤君のことが気になっていたからかも知れない。
本人はお酒、食事には気を使っていたが、皆それなりに楽しい時間を過ごせたと思う。
今から思えば、それが私の佐藤君との最後の別れとなった。

私が大学２年になった４月。入学式の後まもなく、佐藤君は一人、山岳部部室にやってきて、即入部した。四国・高松高校山岳部出身の明朗闊達なＦＲＥSH　ＭＡＮ。若かった。その日の情景は今でも、まぶたに浮かぶ。穢れを知らぬ、純真な若者の印象が強い。

私は一年上の山岳部員として、彼とは数々の山行を共にしたが、一番印象に残っているのは、四回生になる前の春山―船窪岳から後立山連峰を縦走し、白馬大池を経て栂池に至る３週間以上の縦走登山。最終到着地の栂池を眼下に、白馬乗鞍岳からの長大な尻セードを存分に愉しんだ。無事に下山できる喜びもあり、わいわい叫びながら滑った。

佐藤は逝った。誰もがその時を迎えるにしても、やはり、突然で、早かった。

何事にも情熱をもって対応した、嫌味のない、人に好かれるいい奴だった。

佐藤一良君を偲んで

丸子　隆志

若き青春時代山登りを共にした先輩、後輩達がこの１０年足らずの間に次々と亡くなり大変悲しい思いをしている。苑樹、鷲田両先輩、小林、諏訪、宮崎そして佐藤君、先には岡内先輩、後藤君と今日の平均寿命を考えるとあまりに早い死である。佐藤リーダーの下に活躍した諏訪、小林、後藤、宮崎君達に呼ばれたのか、高松の先輩岡内女史に呼ばれたのか、何か因縁めいたものを感じないではおれない佐藤一良君の早い死である。

北田荘と山岳部

佐藤君が入室した頃の北田荘は様々な市大学生がおり、当時、学生自治会の委員長になった田宮高麿君（ハイジャックで世間を騒がせ北朝鮮で死去）等学生運動に没頭する者、マージャンに明け暮れる者、女性を連れ込む者、司法試験を目指し黙々勉強する者と種々雑多な学生が住むアパートであった。佐藤君に梅島君に私と、三名の山岳部員が入室したことで、大学も近く山岳部員がよく集うようになった。佐藤君は読書家で私など見向きもしない文学書を読み漁り、楽器を巧みに操り羨むことも多く、１年後輩ながら彼から山以外では随分教わったと思う。二人でよく食べた、どんぶりでの卵飯の味は未だに懐かしい。私は卒業１年足らずで故郷広島に戻り再就職し北田荘に行くこともなかったが、当時部室が火災に遭ったりしていたので佐藤君の部屋が部室として活躍したであろう事は想像に難くない。佐藤君をリーダーとする後輩達がランタン・リルンにこだわる先輩と違い自由な発想でヒマラヤ遠征を語り始め、市大山岳会として６年ぶりとなるカンジロバ遠征を企画したのも北田荘であったろう。遠征準備に忙しい１９７０年２月、私の結婚式に快く出席し山仲間と披露宴を盛り上げてくれた事も忘れえぬ思い出である。

カンジロバ遠征の成功は次のランタン・リルンの初登頂、四光峰初登頂へと市大山岳会の若手育成のきっかけであり、市大山岳会で佐藤君の果たした役割は実に見事と言える。

佐藤君２回生の５月山、西穂高岳から槍ヶ岳への縦走を終え私は帰省したが、彼は「市大に入ってデモも経験しないのはいかがなものか」との私の一言もあってか帰省もせず、初めて参加したデモで逮捕されたりもした。　大学４年間が佐藤君との山行の全てであるが、忘れえぬメインイベントは烏帽子岳から白馬岳へ後立山連峰を４週間かけて縦走した春山合宿である。鹿島槍ヶ岳キレット小屋での食料のない３日間の沈殿今も鮮明に思い出せる。最終下山地栂池で昨年２月共にスキーをしたのが最後となってしまった。　ここ数年白馬山麓の栂池でスキーを共にした事で、佐藤君との色々な思い出を一生忘れえぬものにしている。今年も栂池スキーで会えるのを楽しみにしていたのに残念でならない。合掌

同期の桜

同期生　　山田　裕敏

昭和３８年４月、入学式と相前後して訪れた木造平屋建ての部室。西面に開けた前庭から二段ほどのステップを上がった入口付近にデスクがあって、佐藤一良君は小生より一足早くその椅子に座っていた。彼は鶏年の生まれで朝の起きだしが早く、それだけで留まらず常に物事への取り組みが早く、小生などはいつも遅れ遅れであった。山登りでもいち早く赫々たる成果を挙げたし、３人のお子さん達も次々と結婚し孫に囲まれるという家庭環境にも恵まれた。そして晩年には早々にスキー・スクールを中退し、あっと言う間に泉さん・大橋さん・後藤君などの世界へとびだして行ってしまった。社会人として現役で、自他共に今後の活躍への期待があった人物の突然の逝去に当っては、当人への哀悼の気持ちがより強く働くものだが、今回の場合はそれがない訳ではないが、取り残されたという当方の残念感がそれにも増して強く働くことに驚かされている。

彼の入部は郷里の高松高校山岳部の先輩である岡内朋子さんを慕っての事で、現役時代にはそれほど意識しなかったが、その後の生き方を振り返れば、最初から山登りとそれを取り巻く環境に彼流に居続けることを決めていた人生だったように思われる。

勿論多才な男で、いわゆる山屋一筋という風情は出さなかったし、折からの高度成長を続ける日本社会にあって、海外に生産地と販路を求める商社員として時代の最先端の道を辿るわけだが、その原点として、山岳部員就職先の名門である「蝶理株式会社」を選んだことで、このことが明示されている。

卒業のころは長く続いたネパール・ヒマラヤ登山禁止時期の最中で、小生などは山の事より社会人としての世の中との関わり合いに熱中していた訳だが、彼は程なく西ネパールの未踏峰「カンジロバ・ヒマール」への遠征隊の中枢に座り、これを成功させた。後の四光峰の時もそうだが、小生は大阪を離れており、遠征の組成や登攀過程は不明なのだが、推測するに、彼の組織力と決断の良さが与かって大業を成し遂げたものであろう。勿論大勢の方々との共作であることは申すまでもないが、それらを纏め上げる魅力の持ち主であった。もう少し言えば、為そうと努めても容易なことではなく、それらの過程は幸運に恵まれて、という強運の人でもあった。

桜の花が５弁から成るように、わが山岳部同期も５人いた。医学部の諏訪真一君は、終世頼りにしたいドクターだったが、惜しくも数年前に癌がもとで他界している。工学部の毛戸彰禧君は氷ノ山々麓の出身で、新人合宿ではスキーの上手さに驚かされた。途中で部活動から遠ざかってしまったが、今も在阪の電鉄会社役員として活躍中。島川勝君は母校法科大学院の名教授。佐藤君と小生とは経済学部で川島ゼミナールでも机を並べるという縁の深さであった。

「散る桜　残る桜も散る桜」と言うように、いずれ我々もあちらの世界へ渡るわけだが、今暫し体調を維持し、スキー練習にも精進してトレッキングやスキー・ツアーに羽根を伸ばし、冥土の土産話の種をふやしたいと思っている。

佐藤一良　追悼文

島川　勝

岩登りが特別うまかったわけでもなかった
体力が人並み以上に優れたというのでもなかった
繊細な感覚を豪快な笑いと酒でごまかしていたな

大学１年の夏山は剱だった
大日岳を重いリックを担いで喘ぎながら、君が早くバテないかと思ったりした
チンネでザイルを組んだな
バンドで休んで、クラックを登ったら、そこは思い切りの青空だった
三の窓の雪渓はとても長かったな

大学の部室は暗くて広かった
ザイルとか山の道具が雑然と置いてあった
山に登る意味は何かとか、わからないことを言い合って時間を過ごしたな
デモに行ってパクられて
出てきた時には嬉しそうだったな

四光峰の風はどんなだった
ラサで暴動があったが、あやうく入国できた
丁寧な字で、毎日君の手紙が私の事務所に fax で届いたな
若手の隊員を冷静で暖かな目で見ていた隊長だったな

もう君はいないのかという小説があったが
本当にもう君はいないのか
天にも続く頂上で昼寝でもして待っていてくれ
もう２、３ピッチで行くからな

佐藤さんの思い出

澤井　弘忠

私は昭和４１年４月経済学部に入学しましたが、大学での生活はほとんどが山と何かで終了でした。当時４年生の佐藤さんがリーダー、山田さんがサブリーダーで島川さんとの３名でした。３年生が不在で、２年生に奥田さん　小林さん　梅島さん　殿本さん　春野さん　の５名、新人が８名（後藤　兵頭　広瀬　大島　小山　宮崎　二上　澤井）で引き続き４年生がリーダーシップを取られておりました。山田さんが小生の兄と小学校からの同級生で、入部の意思表示もしていないまま自動的に入部が決定しておりましたが、素晴らしい部室でした。進駐軍の接収ハウスでペンキがカーキ色で藁ベッド付でした。毎日、教室に居るより部室に居る時間が長くて、まさに学部は山岳部でありました。ルーム日誌なるものがあり、小難しいことが書かれており、大学らしいアカデミックさを感じるのでありました。佐藤さんも上手な字でよく書かれておりました。本人は足が少し悪くて、びっこを引いて歩いておられました。なんでも道場の不動岩で滑落され骨にひびが入っており、本人が捻挫と思い込んでおられて発見が遅れたため、春山にも行けず治療が長引いておりました。すごくまじめな感じの方でした。名門・高松高校出身らしい秀才のイメージでした。

５月の岳沢新人合宿(たくさんのＯＢ　伴さん　常慶さん　進藤さん　上田さん　松永さん　小倉さんが参加)が無事終了し、６月の個人山行を山本（５月に入部）と２人で鈴鹿山脈全山縦走をし、連日雨で最後のピークが御在所岳でした。雨具はポンチョしかなく下着までぐっしょりで、最後の夜はユースホステルに宿泊しました。報告会で佐藤さんから「弘忠、おまえ何考えてんねん、山岳部はテントに泊まるのが当たり前や。」とこっぴどくしかられ、山岳部はそんな所と納得したのでした。

１２月の冬山合宿は知床半島全山縦走を計画。２隊に分かれ、佐藤隊は知床岳から半島の先端まで、山田隊は羅臼岳　硫黄岳　で、小生は山田隊でした。生涯でもっとも寒い体験でしたが、計画検討時に食料の軽量化を計画。主食は「すいとん」で、昼食はキムラヤの特製パンでした。沈殿日の数グラムのココアをどうするかで小林さんと佐藤さんが大論争になり、われわれ１年生は小林さんの持参の意見に傾いておりましたが、結局リーダーの意見通り持ってゆけませんでした。とても腹の空いた合宿でした。やはり、リーダーはえらいのやなあと思いました。

卒業後、蝶理大阪本社に入社され、われわれはよく面倒を見ていただきました。

本社地下にあった喫茶店「セブン」で、時々は勝手に佐藤さんのサインをし、本人が知らないうちに飲み食いをさせてもらいました。もっとも後藤の利用が一番多かったのですが。蝶理・箕面寮もよく宿泊させていただきました。前日曽根崎でめちゃくちゃ飲んだ後、タクシーで箕面まで帰り、雑魚寝して翌朝　佐藤さんは２日酔で出社、われわれはゆっくり寝て朝食まで頂きました。あまりたびたびだったので、寮のまかないの姉さんにすっかりなじみ、随分と余分なおかずまで頂戴しました。すべて佐藤さんへのツケでした。本当にお世話になりました。

カンジロバヒマールでは副隊長で、ベースキャンプ手前のキャラバンでポーターに日本語でしっかり怒っておられたことがありました。怒りは外国語では伝わらないなあと思いました。登頂日、佐藤・澤田パーティと奥田・澤井パーティに分かれ、頂上でじっとうつむきながら感動に浸っておられた姿が忘れられません。

佐藤さんは山岳部にしてはあまり泥臭くなく、頭がよく、マネージメント能力はとても高い人でした。心が広く、常に兄のような存在でした。酒が好きで自分の人生を生ききった人でした。本当によく面倒を見ていただき、とてもありがたい先輩でありました。
心よりご冥福をお祈りします。
思い出にもならない文章でしたがお許しください。　合掌。

カンジロバ登山隊・国内合宿（穂高・岳沢）
１９７０年５月　河童橋付近

佐藤隊長と四光峰

福山　昇二

佐藤さんの突然のご逝去にただ驚いています。山岳会運営の中心となっておられた方であり、無念でなりません。

私は、１９８９年、大阪市の市制１００周年を記念して企画された四光峰登山隊に参加しました。企画を実行に移すに当って、中国政府への登山許可申請、資金繰り、中国登山協会との折衝等の困難がありましたが、大橋会長、泉さん、広谷総隊長をはじめとする多くの方の尽力により、登山隊は実現に向かって動き始めました。

その中でもとりわけ重大な決定が「隊長を誰にするのか」ということであり、山岳会の重鎮が思い悩んだことではなかったかと推察します。
以前、カンジロバ登山隊に参加した経験、商社で培ったマネジメント能力の評価、又、誰からも信頼される佐藤さんに白羽の矢がたったのだと思います。

大阪市制１００周年という大きな冠がついた登山隊の隊長を引き受けるのは大変なことだったと思います。　隊が編成された後に、登山合宿でメンバーの結束を図るとともに、装備、食料の梱包・調達を各隊員に指示し、また、その梱包は奥様のご実家の一室を提供していただき作業するというものでした。

いよいよ、登山隊が出発し中国に入国しましたが、天安門事件が起きる直前のことであり、私たちがチベットに入ってすぐにラサに戒厳令がしかれました。
ホテルから一歩もでることなく、目的地　四光峰に出発するという厳しい状況でしたが、ラサを離れると気分はいよいよ山に入るという開放感と緊張に満たされました。

ベースキャンプを設営し、その後、タクティクス会議で登頂者を選定するのが隊長に課せられた役割ですが、佐藤隊長が高度順応の遅れている隊員を登頂者リストから外す決定をした時、「ＡＢＣキャンプもまだ設営されていないのにもう決定するのですか」など不満の声があがり、私もまたその一人でした。
今回の登頂計画は大学の大きな節目を記念したものでもあり、毎日新聞、毎日放送の協力を得る中でテレビ撮影隊も同行するなど大がかりなものでした。佐藤隊長としては、「確実」

に、そして「安全」に登頂して全員無事下山しなければならないとの固い決意を胸に秘めていたに違いありません。

ベースキャンプでの佐藤さんはいつもニコニコして、隊員を気遣い、日本の事務局に定期的な状況報告を送っていましたし、また、隊員一人ひとりの近況を留守宅にも報告するという気配りがあり、このことは帰ってから知りました。

終始リーダーとして沈着冷静な判断を下した佐藤隊長により、四光峰初登頂の成功はもたらされたといっても過言ではありません。

自身で登頂したいとの私の願いは叶いませんでしたが、この登山隊に参加してよかったと改めて思いました。佐藤さん、ありがとうございました。

合掌

四光峰登山隊・国内合宿（剱岳東面）　　１９８８年５月

佐藤さんの訃報に接し、深く哀悼の意を表します。

田中　博之

佐藤さんの逝去を悼み、山岳会会報特別号を出すとのお達しです。四光峰の遠征隊員のひとりとして何事かを記さなければならないと責務に思うわけです。しかし四光峰遠征も20年の時を越え、記憶も希薄となってしまいました。さらには、不肖の後輩は四光峰登山以降に佐藤さんとの親密な交際や山への同行もせず、取り留めもないことを書いてしまいそうですが、お許し願います。

四光峰の遠征は中国、チベットの政情不安の中を敢行されたもので、隊長としての佐藤さんの苦悩は計り知れないものがあったにちがいないのですが、そうした気配を全く感じさせない名隊長でした。登山活動にはいると八木君の高山病、下田君の肋骨骨折、小倉君の凍傷など少なからず医学的トラブルもあり、佐藤さんを悩ませたとは思いますが、幸いにも登山活動に差し障るほどの大問題にはなりませんでした。下界の些末事を処理して山にはいったあとは佐藤さんの難儀もさほどではなかったかに想像します。その余裕のためか、高所で咳き込みながらも煙草を止めずに「田中君、医者はおれの声を聞くと、みんな、それは喉頭癌の声だと言いよる。」とあの独特のハスキーボイスで笑いながら言われていたのが印象に残っています。もちろん癌などとは縁もゆかりもなく、ご自身の健康に強い自信をお持ちだったと思います。酒に関しましても超弩級の酒豪で、「中国で白酒の乾杯を立て続けにやっても誰もおれにはかなわない。」と笑っておられました。

その豪放磊落な佐藤さんが６４歳でなくなるとは信じられない思いです。

６５歳退職予定を間近にし、きっとこれから山に精力的に行かれるにちがいないと思っておりましたところ、自己免疫性腎炎？で入院されたと伺いました。心配してはおりましたが、佐藤さんのことだからすぐに回復され、山に復帰されることと信じていました。
実際、山へのリハビリに励んでいるとのことで安心していたのですが‥‥。

12月3日の突然の訃報には驚愕してしまいました。死因は多臓器不全と伺いました。四光峰以外での佐藤さんのことはよく存じ上げないのですが、ことさら、ひとつの臓器の問題ではなかったという点で、日頃の無理が相当にあったのではないかと想像せざるを得ないところです。ただ、四光峰での酒、煙草の思い出から察すれば、人生を生きたいように生きてこられたと思います。最期は自分で救急車を呼んで、入院して１週間ほどで亡くなられたと伺いました。お叱りを受けることを承知で申せば、佐藤さんにふさわしい最期だと思ってしまうのです。

合掌

佐藤隊長の思い出

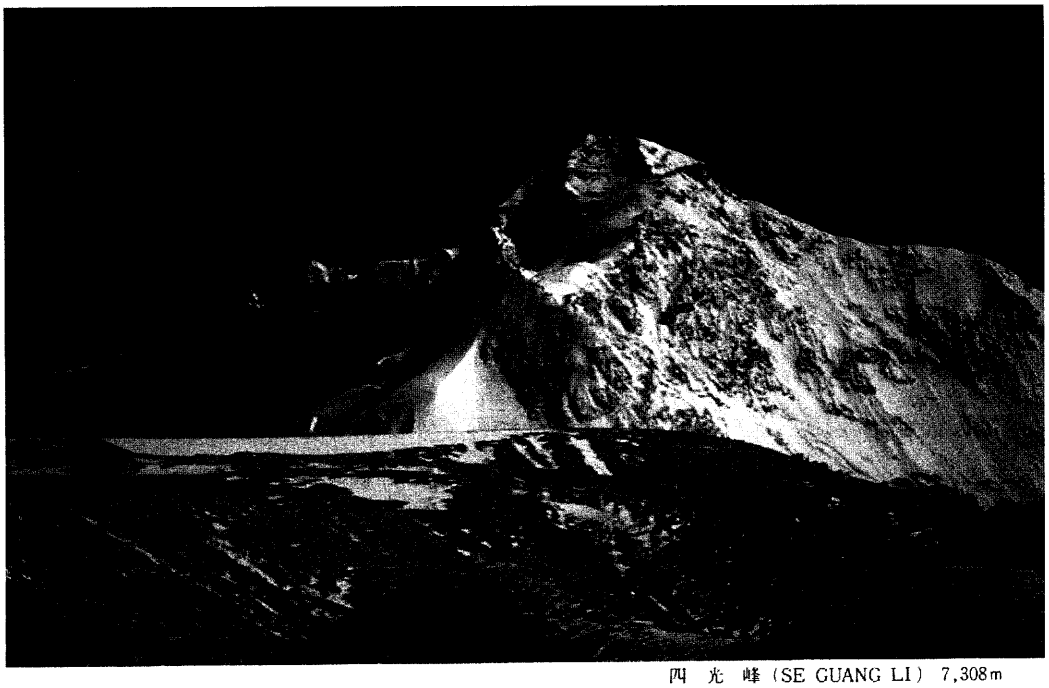
奥田　尚志

佐藤隊長と最初にお会いしたのは、いつだっただろう。

四光峰のメンバーが決まった時は、ずっと北京にいたので、北京でお会いしたのが最初のような気がします。

今から思えば、四光峰のメンバーは、世代的にかなり離れていたので、かなり大変だったと思います。それをまとめていくのは、並大抵のことではなく、責任感の強い根っからのリーダーになるべき人でした。
言うべきところは言う、引くところは引くという壷を押さえているというのが正解でしょうか。

今でも、BC から四光峰のルートを眺めながら、満足そうにタバコを吸いながら目を細めている佐藤隊長の顔が目に浮かびます。



四　光　峰（SE GUANG LI）7,308m

佐藤さん

尾形（矢倉）　睦

四光峰を前に私は職場を辞めることになった。
これは隊長には連絡せねばなるまい、と佐藤さんへ電話を入れるとお宅で夕食をご馳走になった。 既にご機嫌な私に「ほんで今日は何やったかな？」「いやあ、たいしたことないんですよ。クビになったんです。」「なんやそんなことか。てっきり子供ができたとか相談されると思てた。深刻そうな声やったから。そんなん何とかしたる。」と笑われた。

四光峰へ行く前にはすでに、私の次の職場は決まっていたようだった。
しかしひょんなことから私は佐藤さんの直属の部下として働くことになった。

佐藤さんは上司として私とは距離を置いていたようだったが、しかしやりたいことは全てやらせてくれた。しばらくすると「おい、おまえの評価を聞いてきたぞ。まかせるから自分で書け」と紙を渡された。新人の専門知識や協調性など各項目に点数をいれるようになっている。自分で書くならすべて満点、いや専門知識だけ１点引いておこう。にやにや顔の佐藤さん。

ほぼ毎日飲んで帰る佐藤さんにお供し、飲み歩いたのは楽しかった。
給料日に飲み屋の支払いツアーに同行したときなど、何軒まわったろうか。一杯だけ飲んでは支払いを終え、また次へと行った。

四光峰に行くまでは佐藤さんとはほとんど面識はなかった。隊員ひとりひとりに心配りをする人だった。
一緒に働き出してその人となりをもっと知った。私にその心配りを教えようとしてくれた。しかし私はそれを自分のものには未だにできていない。生意気な私が吐く考えなしの言葉を、たまにはめずらしく腹を立てたように否定した。
部下へも上司へもお客さんへも飲み屋のママにも山岳会の先輩たちへも私たち後輩へも心を尽くしてくれた。あんな風だとどこで発散していたのかと今になって思う。

しばらくして佐藤さんは東京へと異動になりそして海外赴任となった。年月はたったが、あれからお会いしたのは数えるほどだ。何かを返そうとしても返せないくらい大きなものをもらったのに、もういなくなってしまわれた。いつかまた一緒にお酒が飲めるのを楽しみに待っておこう。

佐藤さんの思い出

下田　勝久

忘れもしない出来事は、四光峰の登頂隊員を決定するときに、「何でこんなに元気なのに外されるんだろう?」という本当に頭にあった疑問だけを佐藤さんにぶつけたことですが、隊員の人命を預かっている佐藤さんには選択の余地は無かったんだろうという実感が社会人になってよく分かりました。

また、佐藤さんは、会合なんかの後に飲み会に連れて行っていただき、「下田君よ・・・」で始まる含蓄の深い話をしていただきましたが、これもまた当時学生だった私や三木君は、あまり深く考えずにそのまんまのストレートな受け答えしかしていなかったため調子が狂われていたと思います。しかし、私のなかでの佐藤さんは非常に大きな存在で、若手に接する寛大で暖かい対応などに触れ、佐藤さんにはなれないだろうけど少しでも近づけたらと思っていました。

現在社会に出て、部下を持つ身になりましたが、何時も文句を言いたくなるのを我慢してうまく軌道修正できるように努めておりますが、顔に出てしまうところなんかまだまだ反省する事ばかりです。

葬儀の席で息子さんが「これから親孝行しようと思っていたのに出来ませんでした」と言っておられましたが、私も同じ気持ちで、佐藤さんとは色々と話したい事があったのですが、勤務先が遠くになってしまった事もあり、大阪に出てくるのを億劫がっていたら、会えないままで終わってしまいました。残念でなりません。

心より冥福をお祈りしております。

4.漢詩

作・澤田　宗博（昭和４７年　法卒）

少少漢詩を楽しんでいますので一句詠べてみます

悼登葱嶺未踏峰大兄

葱嶺（ヒマラヤ）の未踏峰に登った先輩を悼む

駭愕俄然逝阿兄

駭愕俄然阿兄逝く

突然の先輩の死をきいて驚いています

曾同永雪峭山行

曾って永雪峭山行を同じくす

かつて永雪の峭山行をともにしました

嗜煙愛酒難忘貌

煙を嗜み酒を愛する貌忘れ難し

たばこを吸い酒を愛したあの姿が忘れられません

無奈靈前離恨情

奈ともなるなし靈前離恨の情を

ともどうすることもできません

[編集後記]

・昨年末にご案内し、1月に追悼原稿を頂戴して、いよいよ本号を発行する運びとなりました。ご寄稿いただいた皆様に御礼申し上げます。

・私にとって、佐藤さんは読書家でクラシック音楽を好むひとでした。多忙な商社マンでしたが、『塩野七生女史の数々の著作を片手に、2年間で200日余りイタリアで生活』（会報10号。1993. 3発行）し、古代文化やルネサンスの中心地イタリアを満喫できたのは何よりのことだったと思っています。そういえば『よく冷やしたグラッパという地酒をひっかけて北イタリアを走り回っています』との絵葉書（いかにもイタリアっぽいオシャレなコモ湖周辺の絵地図）を貰っています。

・夫人訪問の帰途、「言ってもきかない人」の言葉を反芻していて不意に次の詩句が浮かんできました―「憂きことの　なほこの上に　積れかし　限りある身の　力ためさん」（熊沢蕃山）。腰を超える深雪を力強くラッセルするかのようにひた進んで、突然、居なくなってしまいました。確かな足跡を残して・・・

ご冥福をお祈りします。　（奥田　記）